

## 平成 25 年度 研究助成事業報告

平成 25 年度京友会研究助成対象者に対する助成期間は平成 26 年 5 月 31 日をもって終了した。7 月 18 日までに、6 名全員について報告書を受理した。なお研究費に関する会計報告については、1 人 8 万 3400 円の研究費の実施内訳及び領収書を受け取り、事務局で確認を行った。

### 平成 25 年度 京友会助成対象者

2013 年 6 月 11 日 助成委員 小林哲郎・山名 淳

氏名	学年	助成の種類	講座	指導教員名	研究課題
鄭 谷心	D2	研究	教育方法学	田中 耕治	近代中国における国語教育改革の意義と課題
栢田 恵	M1	研究集会	教育認知心理学	子安 増生	幼児期における感情の理解と表情表現の発達
梶村 昇吾	M2	研究集会	教育認知心理学	野村 理朗	アクションスリップ傾向に対する実行注意機能の関与可能性についての検討
福井 佑介	D2	研究	生涯教育学	川崎 良孝	図書館利用者の権利性にまつわる思想史研究
森島奈々子	M2	研究	比較教育学	杉本 均	スリランカの公教育における中等教育の研究
西郷南海子	M1	研究	臨床教育学	齋藤 直子	小学校図工作教科書『子どもの美術』についての哲学的・歴史的研究：「子どもの主体性を育てる教育」とは何か

## 平成 26 年度 京友会助成委員会選考結果

審査委員の小林哲郎先生と山名淳先生により、京友会平成 26 年度度研究助成金の審査が行われた。応募は 8 件あり、審査の結果、8 件が採択された。審査においてはこれまでの研究成果や継続性を踏まえ、問題意識や研究計画が精査され、その妥当性や発展性から採択が決定された。

### 平成 26 年度 京友会助成対象者

2014 年 8 月 15 日 助成委員 小林哲郎・山名 淳

氏名	学年	助成の種類	講座	指導教員名	研究課題
花田 史彦	M1	研究	生涯教育学	佐藤 卓己	近代日本映画人の文化資本に関する研究
佐々木基裕	D1	研究	教育社会学	稲垣 恭子	現代思想雑誌の社会的機能に関する知識社会学的研究
千葉 理美	D2	研究	臨床心理実践学	松木 邦裕	先天性心疾患術後患児とその養育者の心理的サポートの可能性に関する研究
白銀 研五	D1	研究集会	比較教育政策学講座	南部 広孝	ベトナムにおけるインクルーシブ教育の受益者への影響
白砂 優希	M2	研究	教育認知心理学	楠見 孝	バイアス盲点が認知バイアスの意識的修正に及ぼす影響
福嶋 祐貴	M2	研究	教育方法学	西岡加名恵	協同学習を基盤にしたカリキュラムデザインに関する研究
村井 雅美	D1	研究集会	臨床実践指導学	高橋 靖恵	病理構造の生成過程と精神分析的な心理療法：不適切な養育環境に着目して
坂田 真穂	D3	研究	臨床実践指導学	皆藤 章	身体的ケアを職業とすることの心理臨床的意味について

# 平成 25 年度 同窓会国際賞の選考結果

2014年9月17日 審査委員 小島 勝・田中康裕

氏名	学年	論文題目
林 子博	D3	森文政期における「倫理」と「道徳」のあいだ—『倫理書』と『布氏道徳学』を手がかりに—
ハサン・トパチョール	D1	明治百年祭（1968年）と「京都」イメージの確立

林 子博：

森文政期における「倫理」と「道徳」のあいだ  
—『倫理書』と『布氏道徳学』を手がかりに—

本論文は、2013年12月発行の『教育学研究』第80巻第4号に掲載された論文であるが、1888年に文部省が刊行した中学校・師範学校用倫理教科書『倫理書』の編纂の経緯を詳細にたどって、主として「凡例」によりその内容を再検討し、森有礼文政下の道徳教育の特質を「道徳」と「倫理」の違いを明確にしながらか分析している。

森文政時の時代状況をふまえながら、『倫理書』の内容を精緻に深く読み込んで、これまでの先行研究を緻密に検討し、『倫理書』が愛国心（君臣の関係）や忠孝心（親子の関係）などの諸「情緒」・「感覚」・「感情」の記述を盛り込みながらも、実際には「思想」（知性）の見地からそれらを意図的に相対化する論理構造が仕組まれていたことや、この「思想」には、倫理をめぐる「判断の主体としての個人」が想定されていたことなどの知見を提示している好論文である。できればより平易な論述をしてほしかったが、日本語力も十分であり高く評価できる。

ハサン・トパチョール：

明治百年祭（1968年）と「京都」イメージの確立

本論文は、1968年に東京を中心に全国的に開催された「明治百年祭」と、関連して開催された「京都府開庁百年祭」を考察して、「明治百年祭」の動向と「京都府開庁百年祭」が「京都イメージ」の確立に寄与したことなどを実証的に分析した修士論文である。

「トルコ共和国百年祭」の開催を1つの動機とした本論文は、東京オリンピックや日本万国博覧会の研究蓄積に比べると、「明治百年祭」に関する研究は圧倒的に少ない中、貴重な研究である。特に、メディア・イベントの視角から、「明治百年祭」と「京都府開庁百年祭」を全体的に詳細に分析したことは評価される。「京都」イメージと祇園祭のつながりで、影響を与えた大切な転換点として「明治百年祭」の一環として企画された映画『祇園祭』をあげる研究はなく、メディア・イベントとしての映画『祇園祭』とそれが日本人の祇園祭や京都に関するイメージに与えた影響を明らかにする研究はない中、貴重な研究である。

少ない先行研究の検討や論拠となるデータのより深い分析も行ってほしかったが、今後の課題である、1. 司馬遼太郎や大佛次郎のなどによる小説・映画やドラマのメディア文化の影響力について、物語の構造や普及のプロセスをより広く分析すること、2. 各地方の「明治百年祭」イベントについてもっと詳しく研究すること、3. 海外在住日系人による「明治百年祭」についても研究すること、4. 「青年の船」イベントのアイデアを検討することについても、研究を拡げ深めていってほしい。

# 平成 25 年度助成事業助成対象者報告

## ■鄭 谷心

どのようにして作文に対する苦手意識を克服することができるのか。作文の材料はどこから得られるのか。形式と内容のどちらが優先されるべきなのか。学校教育において、これらの問いに対応する教授・学習の理論と実践がたくさんあったと思います。本研究は、近代中国において活躍した2人の国語教育者に着目し、その答えの一部を明らかにしようとしたものです。

①まず、「作文すなわち生活である」と提言した葉聖陶(1894-1988)の作文教育論を考察しました。デューイの訪中と近代中国の国語科の成立という背景下において、葉の作文教育論はどのようにデューイの教育理論を受容したのでしょうか。児童自身の心理性、社会性に着目し、デューイの「経験の連続的再構成」という観点から、葉が大きな影響を受けたことはわかりました。また、葉はデューイの中国への紹介者であり、白話文・国語運動をリードした胡適(1891-1962)から、思考の訓練を含めた哲学方法の分析、および白話文の文章を組み立てる方法を吸収したことを検討しました。

しかしながら、当時の中国が直面した国語教育における独自の課題、いわゆる形式と内容、国語と文学、白話文と漢文などの二元論の問題がありました。そこで、葉に大きな影響を与えた②胡の理論を取り上げて検討しました。胡は白話文学という形式だけではなく、白話文学を正統化する方法、すなわち言文一致の方法を推奨しました。また、生きた白話文学を作る方法と生きた国語の形成過程との結合を押し進めました。さらに、国語教科書の作成と胡の中学校国語教育構想を検討することで、彼が目指した文学・国語改革の目標と方法が中学校カリキュラムにおいてどのように具現化されたのかを明らかにしました。

お受けした助成金の大半は、これらの研究のための資料収集と学会発表の旅費に使わせていただきました。なお、①についての研究成果を『京都大学大学院教育学研究科紀要』60号に投稿し、②の研究成果を日本デューイ学会第57回研究大会(於：新潟青陵大学)において発表しました。さらに、発表内容を整理したものを日本デューイ学会紀要第56号に投稿する予定です。

## ■柘田 恵

私たちは日々他者とコミュニケーションをとり、対人関係を確立し、維持することで社会生活を営んでいます。私たちが円滑なコミュニケーションを実現するためには、相手の感情を理解すること、また自分自身が感情を適切に表現することが重要です。そして、こうした感情を扱う能力は幼児期に発達することが多くの研究から示されています。しかしながら、これまでの感情発達に関する研究は感情を「理解」する能力に焦点が当てられたものばかりであり、感情を「表現」する能力についての研究はほとんどなされておられません。そこで私の研究では、幼児を対象に、感情理解に加え、感情表現について調べました。

具体的には、保育園・幼稚園に通う年中児・年長児(4-6歳児)に、主人公がある感情(喜び・悲しみ・怒り・恐れ・驚き)になるお話を聞いてもらい、その時の主人公の感情を答えてもらう感情理解課題と、ある感情の時の主人公の表情を絵で描く描画課題、そして主人公と同じ表情を自分自身の顔で表現する表情表現課題という2つの感情表現課題を実施しました。その結果、感情を理解する能力と感情を表現する能力の発達の間には明確な関連が見られず、感情を理解する能力と感情を表現する能力は、異なる発達過程をたどる可能性が示されました。また年中児においては、描画で表情を描く能力と自分の顔で表情を表現する能力に関連が見られ、感情表現能力の向上における描画の有効性が見出されました。

この研究で得られた成果を、京友会の助成金により、北海道で開催された日本心理学会第77回大会でポスター発表させていただくことができました。初めての研究集会参加であったため、発表では緊張や不安も感じましたが、多くの方が私の研究に興味を持ってくださり、意見交換を盛んに行うことができ、大変有意義な経験ができました。また自分の発表以外にも、様々な研究発表やシンポジウムを聞くことができ、学内では知ることができない研究に触れ、新たな知見を得ることができました。今回、研究集会に参加できたことにより、自分自身の研究に対する考えを深められただけでなく、視野を広げることもでき、今後の研究へのモチベーション向上につながりました。



また、本集会でも発表いたしました研究内容は、2014年度の『発達心理学研究』（第25巻、第2号、pp.151-161.）に掲載させていただくことができました。

このような素晴らしい機会を与えてくださった京友会の皆様には心より感謝申し上げます。

## ■梶村 昇吾

私たちは例外なく、しばしば言い間違いや物忘れなど不注意による失敗をしていますが、失敗のしやすさには大きな個人差があることが知られています。本研究では、そのような失敗傾向の個人差と関連する認知的な要因についての検討を行いました。

認知的失敗の中でも、ルーチン化された行動への注意が不十分なために生じる失敗はアクションスリップと呼ばれ（手に持っていたものをなにげなく置いたあとで、どこに置いたか思い出せない、など）、その個人差が事故や大きな失敗と関連することから、その原因や介入法について盛んに研究されています。アクションスリップ傾向の個人差は、認知的失敗傾向尺度という質問紙によって測定され、これまでに尺度得点の個人差と妨害刺激の抑制能力・葛藤解決能力・集中力など、個別に様々な注意機能との関連が示されてきました。しかし、それらの注意機能が同時に求められるような状況における能力差が、アクションスリップ傾向の個人差とどのように関与するのかについては不明でした。そこで本研究では、妨害刺激の抑制・葛藤解決・集中力が必要となる課題を用いて実験を行いました。

その結果、アクションスリップ傾向が高い群では、いずれの注意機能についても低い成績を示していただけでなく、アクションスリップ傾向が低い群では課題の経験を経るにつれて反応のばらつきが減少していたのに対し、高い群ではむしろ増加していました。これらの結果から、アクションスリップ傾向が高い群では、複雑な注意の処理能力が低いのに加えて、行為の精度も低いということが明らかになりました。

京友会から賜りました助成金は、2013年9月に北海道で開催された日本心理学会第77回大会での成果発表に係る費用に充てさせていただきました。研究集会では、分野を問わず多くの研究者と議論を交わし、本研究の課題や発展性についての考察が深まりました。今後は、それらの議論をふまえ、失敗傾向を引き起こす脳機能の問題について明らかにし、非侵襲脳刺激法を用いた介入法の提案までを行っていきたいと考えております。このような機会をいただきましたこと、心より御礼申し上げます。

## ■福井 佑介

私は、図書館利用者に対して情報への接近を権利として認めるといった思想の展開の解明を構想している。この思想は、図書館の社会的役割や自立的規範を表明する文書の中核に位置する。そこで、本研究では、当該文書の制定過程の議論を通じて、権利に関する外部領域の議論を図書館界がどのように認識していたのかを検討した。

予備研究を踏まえて検討対象に設定した概念は、「知る権利」と「学習権」であった。まず、各概念について、法学や教育学での議論の展開について、文献研究を行った。さらに、図書館界の議論にまつわる文献を収集するとともに、「図書館員の倫理綱領」（1980年）の制定の当事者に接触し、一次文献を入手した。そして、以下のことを明らかにした。

まず、法学の知る権利論は、表現の受領を妨げられない権利（自由権）のみならず、情報の提供を得る権利（請求権）も含意するようになった。それに伴い、同概念は、ジャーナリズムの地位向上と国政情報の公開という、2つの文脈の中で使用されるようになった。一方、図書館界は、1970年代後半の議論で、知る権利の権利性に関する理論構成を受容した。同時に、前述の2つの文脈で捉えることは提供する情報の矮小化につながるとして拒否し、志向する情報の範囲では最適化を行った。なお、この研究成果は、日本図書館研究会研究大会での学会発表を経て、本研究科の紀要（第60号）に論文として発表した。

また、学習権は、教科書裁判が衆目を集めた1970年頃に一部の図書館員が積極的に取り入れ、それまで不十分であった障害者サービスを促進する理論のひとつになった。さらに、倫理綱領の綱領案では、採択の直前まで、図書館の目的の一つとして、学習権の保障が組み込まれていた。しかし、倫理綱領の制定者たちは、学習権という概念の曖昧さや、(資料の利用を伴わない)学生への席貸しが連想されることなどを認識するようになった。そこで、知る権利を学習権の上位概念と捉えることで、学習権という文言を削除するに至った。

## ■森島 奈々子

スリランカは人口約 2000 万人の多民族国家であり、公用語をシンハラ語とタミル語の 2 言語、英語をリンクランゲージ（連結語）として位置付けています。同国は途上国とされていますが、他の南アジア諸国に比べ高い教育水準を確保し、1985 年の時点で、初等教育純就学率は 100%、15 歳以上の成人識字率は 91.1%（1998 年）を達成している国です。

スリランカは、将来を担う次世代の育成のために、授業設備などの学習環境が整った質の良い中学校の開発を目的に、2012 年に 1000 Secondary School Development Programme（1000SSDP）を開始しました。このプログラムは、新設または既存学校の設備増築することで、各教育地区にそれぞれ少なくとも 3 校はこのような中学校が配置されるよう、1000 校が選抜され進められています。

本研究では、1000 SSDP を通して、スリランカの教育政策の成果とさらなる発展のための課題への取り組みについて考察し、同国の中等教育がどう展開し、どのように位置づけられているのかを明らかにすることを目的としました。

2 週間の現地調査をおこない、実際にプログラムに関わる教育関係者や教員へのインタビューとプログラムに選ばれた 7 つの学校を訪問することができました。教育関係者へのインタビューを行うことで、1000 SSDP について政府と現場の両者の認識を明らかにすることができました。両者の共通した認識として、プログラム開始前に想定されていた、生徒の 1000SSDP 学校へ入学の流れが起こっていることがあげられました。これは、政策が目的としていた中の 1 つの成果が学校現場において実際に表れている証拠になると考えられます。文献による調査と現地調査を踏まえ、スリランカの発展において中等教育は、初等教育と中等教育のネットワーク、中等教育から高等教育への接続、そして労働市場とを結ぶ核として、教育政策の最も中心に位置づけられていることが明らかになりました。

以上の研究結果は、修士論文としてまとめました。京友会からいただきました助成金は、スリランカへの現地調査の渡航費として利用させていただきました。このような機会をいただきましたことを心より感謝申し上げます。

## ■西郷 南海子

このたびは、本研究への助成をありがとうございます。『子どもの美術』（現代美術社刊）は 1980 年から 1995 年まで出版された文部省検定済・図工教科書です。採択に苦戦し、出版社の経営難から絶版となっていました。報告者の呼びかけが実り、2013 年秋に復刊を果たしました（復刊ドットコム刊）。この教科書には、大きく分けて 2 つの特徴があります。

1 つには、美術を学ぶ意味を言葉で問いかけた点です。従来、図工教科書とは参考作品が多数掲載されているカタログのような存在でした。これに対して同書は、美術を学ぶ意味を言葉で明確に打ち出すことにしました。いわゆる「上手い／下手」ととられるのではなく、子どもが自分の目を見たことを、自分の頭で考え、自分の手で作ることを訴えました。佐藤忠良（彫刻家）や安野光雅（画家）といった日本を代表する芸術家が、それぞれの言葉で子どもに問いかけるというスタイルをとりました。

特徴の 2 つ目は、その出版形態にあります。1963 年の教科書無償措置法により、教科書は無償で子どもたちに配られるようになったものの、教科書採択の単位は教育委員会が定める「広域」となりました。国が買い上げるために教科書単価が低く設定され、採算ラインは 20 万部となりました。そのため、出版社はまずは採択を確保するために営業活動を行わなければなりません。『子どもの美術』執筆者たちは、このことが教科書の質を低下させていると考え、営業活動を排した教科書づくりに乗り出しました。この経緯を調査し、『子どもの美術』の編纂経緯と採択の壁—「商品ではない教科書づくり」の挑戦（『教育史フォーラム』、教育史フォーラム・京都、第 9 号、2014 年、pp.61-73）にまとめることができました。

『子どもの美術』については、先行研究が非常に少ないため、その取り組みの全貌は明らかになっていません。報告者は、助成金を活用することで、資料を収集し、当時の関係者への聞き取り調査を行いました。同書が提起する様々なテーマは、今日の教育と無関係ではありません。調査の成果をもとに、これからも研究を進めてまいります。

# 60周年記念助成事業助成対象者コメント（平成26年度）助成を受けて

## ■花田 史彦

このたびは京友会研究助成の対象として採択していただき、誠にありがとうございます。

私は現在、近代日本映画人の出自・経歴について研究を行なっています。具体的には、戦前から戦後にかけて活躍した岩崎昶（いわさき・あきら。1903～81年）という映画製作者・映画評論家を素材にしています。岩崎は大正期に青年時代をすごしました。東京帝大在学中にマルクス主義に傾倒、階級闘争のための手段として映画を位置づけた製作活動・評論活動を展開します。また1930年代には中国に渡り、現地の映画人と交流します。その後、戦時下に政府の映画統制に反対した咎で投獄されますが、戦後映画界に復帰し、映画をとおした日本の民主化やアジアの民族の連帯を唱えるなど精力的に活動しました。

20世紀のはじめに東京に生まれ、第一次世界大戦後、マルクス主義隆盛の1920年代に学生時代を過ごした岩崎は、映画を自らの思想宣伝の手段（＝メディア）として位置づけます。彼は戦後も映画をとおした人々への思想宣伝を行います。その発想の原点は戦前にあったと言えます。ここから見えてくるのは、戦前・戦後を貫く近代の連続性です。本研究は、岩崎昶という人物の出自・経歴に焦点を当てることでそれを明らかにしようというものです。

具体的な方法として現時点で考えているのは、まず岩崎が書き残した膨大な著作や雑誌記事の分析および岩崎を知る関係者への聞き取り調査です。また公刊されていない一次史料の発掘も試みたいと考えています。これらの方法によって、岩崎の人物像を立体的に浮かび上がらせ、彼が体現する戦前・戦後の連続性という仮説を検証したいと思います。そのための資料収集や旅費に助成金を使いたいと考えています。

## ■佐々木 基裕

平成26年度京友会研究助成の対象として採択していただいたことに感謝申し上げます。

私の研究の目的は、1980年代に発生した「ニュー・アカデミズム」現象に代表される現代思想という表象がいかにして成立し、日本の教養文化においていかなる機能を果たしていたのかを解明することです。かつて加藤秀俊が「中間文化」の重要性を説いたように、総合雑誌や思想誌といったメディアは日本的な知の形成において重要な役割を果たしてきました。そうした教養メディアの系譜の上に『現代思想』や『エピステーメー』などの現代思想雑誌を位置づけ、学会を中心とした専門性に基づくアカデミズムとも、商業的価値が優先されるジャーナリズムとも異なる中間的な領域としての現代思想雑誌の社会的機能を検討することは、近年の高等教育改革において求められている「学際性」に関する議論とも通底していると考えています。しかしながら、現代思想という対象は批評などの領域で盛んに語られる一方で、実証的な研究を欠く傾向にあります。

そこで今回の助成金を活用し、現代思想に関する知識社会的な検討の礎として、現代思想雑誌における著者情報のデータベース化を計画しております。著者の属性を詳らかにすることで、アカデミズムにおいてどのようなポジションをとる学者が現代思想を受容する傾向にあったのかを明らかにします。そのことによって、アカデミック・ジャーナリズムという位相における現代思想雑誌の社会的機能を実証的に分析することを目指します。

## ■千葉 理美

この度は、京友会の助成対象に選んでいただき、誠にありがとうございます。心より御礼申し上げます。

本研究は、先天性心疾患術後患児（以下術後患児）とその養育者に特化した心理的なサポートの在り方を見出すことを目的としています。先天性心疾患は、生まれつきの心臓の病気であり、生死に関わる病ですが、近年の医療技術の進歩により、術後患児の85-90%が思春期、成人期を迎えることが可能となっています。しかし完全治癒に至る場合は少なく、多くは慢性疾患として生涯に渡る経過観察が必要となります。その中で、術後患児及びその養育者は早期の長期入院経験や手術経験の影響、そして疾患の受け止



めを巡る問題など人生の早期から成人に至るまでの発達段階において様々な心理社会的発達課題が認められると先行研究では指摘されています。そうした状況を受けて近年では患児・養育者に対する心理的サポートの必要性が指摘されていますが、実際にどのような支援が必要になるかという点について未だ確固たる方針が見出されていない現状があります。どのような支援が可能かを見出すためには術後患児の発達の課題の性質やそれが生じる背景をより詳細に分析する必要があると考え、本研究ではこれまでも術後患児とその養育者を対象に半年に一度の継続調査（子どもへの発達検査、養育者への面接調査）を行ってきました。調査を通して長期入院や安静が必要な乳幼児期の生育環境・養育環境により、発達の土台ともなり得る「環境に働きかけ、自分で試行錯誤しながら調整する力」の育ちに課題を抱えている可能性が考えられています。しかしこの仮説は継続期間も短期でかつ限られたデータ数から得られたものであり、今後さらに安定した継続調査を行うことに加え、調査データを増やすことが必要と考えております。また、養育者からの聞き取りの情報と子どもの発達検査のデータを合わせて検討することでより養育者・子ども双方のニーズに沿った支援の方法が見いだせるのではないかと考えております。

頂いた助成金は、上記の調査研究のための必要物品や、文献購入に充てさせていただきます。本研究が先天性心疾患患児とその家族への支援につながっていくことをめざし、今後さらに邁進していく所存です。

## ■白銀 研五

この度は平成 26 年度京友会研究助成事業に採択いただき、同窓会会員の皆さまに心より感謝を申し上げます。研究集会への参加は、成果発表だけではなく、議論を通し今後の研究への新しい視座を獲得しあうとともに、調査に協力してくれた当該国の人々への研究成果の還元という意味で貴重な機会であると考えています。そのため、今後も将来の研究者養成のための研究助成事業を継続していただけたらと思います。

本研究は、ベトナムをフィールドにしながら、障害児を中心に特別な教育的ニーズをもつ子どもへの教育がどのように展開されているかを分析し、教育における公正性、望ましい教育環境の構築への視座を提供することを目的として進めています。研究の手法は、ベトナムを主として政府・国際機関政策文書の文献調査と、親を主な対象とした質的・量的データの採集という手法をとっています。これまでの研究では、世界的に展開される教育政策が当該国であるベトナムで受容された際、社会主義国としての国家建設のための教育に個人の教育権の保障という観点が入り入れられる一方で、ベトナムの教育観の根底には現在も社会全体で個人の教育権を保障しようとする傾向があり、受容した教育政策にも通底していることを明らかにしてきました。また、不十分な教育制度・設備を補完するかたちで親同士の個人的なつながりが地域社会で展開している反面、障害児をもつ親は学校を中心とする地域的なつながりが希薄であるということがわかってきました。今後は、不十分な教育制度・設備の下で子どもの教育環境を規定する重要な要因として親の地域的なつながりに焦点をあて、そのつながりが子どもの教育環境にどのような影響を与えているかを分析していきたいと考えています。研究集会では世界的に展開される教育政策が実際に途上国で行われた場合、当該国の教育政策に与える影響を提示しつつ、当事者の教育環境を捉える視点として親の地域的なつながりについての分析結果を発表したいと考えています。

以上を踏まえ、今後研究により一層邁進していく所存です。重ねまして、京友会研究助成事業への採択、本当にありがとうございました。

## ■白砂 優希

この度は、京友会の研究助成に採択していただき、誠にありがとうございます。

私は現在、「認知バイアスの認知」について研究を行っております。私達は、日常生活において、経験則（ヒューリスティック）をつかって、限られた情報に基づいて素早く判断を下しています。このような判断は多くの場合有効ですが、時にはエラーを起こして偏った判断をしてしまうことがあります。このようなエラーは認知バイアス（以下、バイアス）と呼ばれ、個人差はあるものの、多くの人が起こしてしまうものです。日常生活においてバイアスは問題となることが少ないですが、社会全体や各個人に重要な影響を与える現実場面（例えば裁判員制度）においては、より正確で偏りのない判断が求められるため、バイアスが問題となることがあります。そのため、私達はバイアスを改善する必要があります。しかし、そもそも私達には「自分は他の人よりもバイアスの影響を受けていない」と考えてしまう傾向があり、自己にお

けるバイアスの存在を正しく認知することが出来ません。そのため、バイアスを改善するためには、まず自己におけるバイアスを正しく認識出来るようになることが必要であると言えます。そこで、私の研究では、先行研究で示されている、バイアスの正確な認知を妨げる要因を明らかにすることによって、バイアスについて正しく認知できるようになるかを検討しようと考えています。

頂いた助成金につきましては、主に実験参加者への謝礼、そして残りは研究に必要な文献の購入、実験の消耗品の購入に充てようと考えております。頂いた助成に感謝するとともに、実りのある研究となるように努力していきたいと思っております。

## ■福嶋 祐貴

この度は、平成 26 年度京友会研究助成事業にご採用頂き、誠にありがとうございました。

私は、子どもたちがコミュニケーション能力やチームワークをはじめとする、他者と関わる協同的スキルを、日々の授業を中心とする学校教育の中でどのように発達させていくことができるのかということについて関心があります。このようなスキルは、例えば OECD（経済協力開発機構）が提起している「キー・コンピテンシー」の中に、「他人と円滑に人間関係を構築する能力」「協調する能力」「利害の対立を御し、解決する能力」の三つを構成要素とする「多様な集団における人間関係形成能力」が位置づけられていることから、今後の社会においてその必要性が叫ばれ、学校教育において育てていくべきとされる能力であることが窺えます。

そうした教育の方途を探るべく、私は協同学習（cooperative learning）に着目しました。これは米国を中心に理論化・実践化が展開されてきている学習指導法であり、子どもたちが力を合わせて学習に取り組むことで、教科内容の習得のみならず協同的スキルの発達の同時達成をも目指すものであります。私が研究対象としている米国の協同学習研究者スレイヴィン（Slavin, R. E.）らによる学校改造プログラム Success for All では、学校規模で、すべての授業を協同学習で行うものとされています。当プログラム内では専用の教材やマニュアルが用いられており、そこには子どもたちの協同を促す仕掛けが盛り込まれています。そうした資料の分析を通じて、教科内容を習得させると同時に協同的スキルを育むためのカリキュラムをいかに編成していけるのかが明らかとなると考えます。

此度の助成金は、現地での資料の収集のために活用させていただきます。我が国の教育現場への示唆に富む成果を生み出せるよう、一層調査・研究を進めていきたいと思っております。

## ■村井 雅美

今回、京都大学教育学部同窓会（京友会）から研究助成を頂き、「日本精神分析学会第 60 回大会」（会期：2014 年 10 月 31 日～11 月 2 日、於：福岡国際会議場）に参加し、一般演題にて口頭発表をさせていただきました。

題目は「こころを揺さぶられながら精神病性の心の痛みに触れ続けること」で、内容は、心の病理を抱える人々の中でも、特に重篤な病理である精神病を抱える方との精神分析的な心理療法過程についてでした。精神病を抱える人と出会う際には、さまざまな気持ちが喚起されます。一般の人々がそうであるように、心理療法家の中にも困惑や恐れ、不安やいたたまれなさ、無力感、絶望感などの気持ちが起こり、自らの心が危機に陥る程に揺さぶられます。そういった気持ちに翻弄されながらも、その困難な面接経過の中で、治療者は自分の感情をよく吟味し、患者の治療に役立てることが大切です。治療者自身の心を保ちながら、精神病性の不安に圧倒されている患者の心に理解を伝えることが必要です。その理解が患者の心にかろうじて届いた時に、患者の病に圧倒されていた正気の心の部分が少しばかり蘇り、回復にわずかな寄与をした経過を発表しました。

予想していたより多数の方々に来て頂きました。病気に苦しむ方々に相対する際に忘れてはならない治療者としての大切な在り方を、聞いて頂いた方々の心に届けることができたのではないかと考えております。

今後は、今回の症例にみられたような、最早期の養育環境の機能不全や不備、不在に着目し、その影響が人の心の形成にどのように関わるのかを探究していきたいと思っています。病気やケガ、事故、出産時の思いがけない状況によって通常の出生や養育がかなわない状況になった時に、人の心はどのような影響



を受けるのか、いくつかの自験例から帰納法をもちいて研究し、図らずもそのような不幸を背負った人々に対する治療法についても研究していきたいと思っております。

最後になりましたが、このような機会を与えて頂いた京友会会員の皆様に心より感謝申し上げます。

## ■坂田 真穂

この度は、平成 26 年度京友会研究助成事業の助成対象者に選んでいただき、誠にありがとうございます。

現在、私は本学の学生である傍ら、850 床規模の病院（職員約 2000 人、うち看護師約 900 人）2 施設で、医療従事者への心理的支援を行っています。いずれの施設も、臨床心理士による職員専用の相談室を院内に設置したのは初めての試みであり、設置構想からシステム構築まで、試行錯誤を重ねつつ立ち上げてきました。年間のべ 900 セッション程度の医療従事者との心理面接を 10 年近く続けてきたその臨床実践を通じて、特に、看護師などの身体のケアを職業とする者に特徴的な心理的諸相や内的葛藤が浮かんできました。しかし、身体的ケアを職業とする者の心理的問題やストレスについて、労働条件や労働者の個人属性といった視点から実施された先行研究は枚挙に暇が無いものの、心理臨床的視点から考察した研究、すなわち、“他者の身体へのケアを職業とすること”の本質的哲学的意味との関係に迫った研究はほとんどありませんでした。そこで私は、本学にてこれまで、身体的ケアを職業とする者の内的葛藤や心理的諸問題について、身体的ケアがもつ互酬性という視点から研究して参りました。身体的ケアを介して、ケアを受ける者と施す者との間には、ケア行為とその費用という交換だけでなく、病者に励ましや慰めを与える一方で、相手の回復や安楽に看護者も癒されているといった、心理的贈与交換がなされていることが明らかになりました。

今後は、“他者への身体ケアを職業とすること”の心理臨床的意味について、身体的ケアの起源や発展について歴史的・民俗学的視点からその成り立ちを探り、ケアを身体性や女性性との関係から検討したいと考えています。今回の助成を受け、そのための文献調査や、インタビュー調査等のフィールドワークが可能になりました。その成果を学会発表あるいは研究論文として発表し、この調査研究を通じて社会に貢献したいと考えております。

## 日常はドラマの宝庫 ～「石ころ式」脚本の作り方

脚本家 今井雅子氏



私が教育学部に入ったのは両親が教師だったということが大きいんですけど、父が高校の数学教師、母が小学校で音楽の先生をされていて、自然な流れで教師というのが数ある夢のひとつになりました。

大学4年の時に教育実習に行きました。そこで受け持ったクラスが文化祭で『オズの魔法使い』をやったんですが、私は授業の準備そっちのけでオズの魔法使いの朝練・昼練・夕練・土日練と燃え、舞台が終わった時に生徒より泣き崩れ、担当教官に「君は教師に向いてない。なぜなら、君が1番楽しんでどうするんですか」と言われ、コピーライターになりました。

そこから、時は流れ、脚本を書くようになりました。みなさん、脚本て見たことはありますか。例えば『子ぎつねヘレン』。こ

れは興行収入18億円かな。大体18億っていうと180万人が見たことになるかなりのヒット作です。頭の中のイメージを、みんなと分かち合う形が脚本で、『子ぎつねヘレン』だったら、キャストとスタッフあわせて100人近くいたと思うんですが、その人達がみんな脚本を持ってひとつひとつのシーンを作っていく、最終的に一本の映画になります。

それを書くのが私の仕事なんですけども、誰でも脚本家になれます。というのは、私は勘違いで脚本家になったんです。私の脚本家の先生は、日本で一番大きな脚本家養成スクールである『シナリオ・センター』を作られた新井一先生です。先生は「一億人いれば一億のドラマがある。誰でも脚本家になれる」と言われてたんです。『月刊公募ガイド』にシナリオ講座という連載があって、シナリオを作って送りました。採用はされなかったんですけど、新井先生から直筆のコメントが返ってきて、「面白い」と書かれていたので、私は「こんな偉い先生がわざわざ返事をくれたから、才能があるんだ」と思って書き続けて、賞をとってデビューしました。ところが、新井先生の訃報を伝える公募ガイドに、「新井先生は病気でお身体がしんどいのに、亡くなられる間際まで送られてきた全ての原稿に返事を書かれてました」と書かれてありました。身体が弱られてたから、実はほとんど直筆が読み取れなかったんです。よーく見ると「面白い」の後に「B」と書いてあって、「A」じゃなかった。だけど私は「B」が読めなかったがために、調子に乗って脚本家になっ

たんです。

誰でも脚本は書けるんです。必要な物は『想像力』。想像力を働かせるのは「？」です。では、具体的に私がどんな風に脚本を書いているかをいくつか紹介します。

映画「パコダテ人」。今は函館港イルミネーション映画祭という名前になって今年で20周年になるんですけども、その映画祭主催のシナリオコンクールで受賞した脚本の映画化作品です。主演のしっぽ美少女は宮崎あおいちゃん、16歳の時です。で、もう一人しっぽが生えてくる人が、大泉洋さんです。夢のような顔合わせの二人にしっぽが生えたという、キャスティング的にもすごく恵まれた映画です。

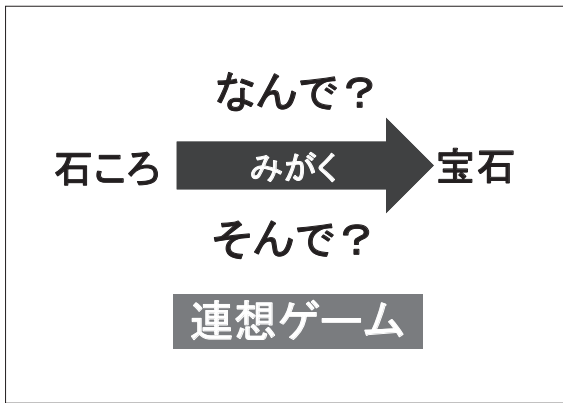
二年続けて賞をとって、二年目に受賞したのが「パコダテ人」なのですが、一年目に『昭和七十三年七月三日』という脚本で賞を取って函館山に招待されまして、映画祭のみなさんと美味しいお酒を飲んで「タダで函館に呼んでもらえて、こんな美味しいお酒も飲めて、楽しい、楽しい」と言っていたら「あんた来年も賞とり！」と言われて「じゃあ来年も書く！」と言って生まれた話です。『昭和七十三年七月三日』が「30年後も幸せだったらここで再会しよう」という初恋の二人のしっとりした話だったので、次はポップな話にしようと思って「ポップ、ポップ」と言ったら「パコダテ」という言葉が、まあ酔ってたんでしょね、「閃いた！」と。そこで「パコダテ、パコダテ」と言って、「パコダテって、ハコダテにしっぽが生えたみたい」って、これも酔ってたんでしょね、それで「何でしっぽが生えたんやろ」て言って、「しっぽが効きすぎて、しっぽ・しっぺ・しっぽ」。で、「製薬会社が試供品を配ったら、それでしっぽが生えて……主人公の家は薬局にしよう」となって、主人公の名前はハピフヘホに○がつくパコダテ語にしてかわいい名前ということで「ひのひかる」に。しっぽが生えると服困りますよね。スカートに穴開けなきゃいけない。「でもスカートからしっぽでてるかわいいいんちゃう？」。しっぽファッションが流行って、その子がアイドルになって、「ピカルちゃん」とか呼ばれて……。こういう風に連想ゲームで膨らませていったんですね。

いざ前田哲監督が撮りましようとなって、ロケーションハンティングいわゆるロケハンに行ったら、函館の市内に撮影できる薬局がなかったんですね。それで、「今井さん銭湯やったらあかん？」て聞かれて、その銭湯がなんと『昭和七十三年七月三日』の舞台にしていた大正湯という函館で一番古いお風呂屋さんだったんですね。「あーこれは運命や」ってことで銭湯にしました。結局、薬局じゃなくても銭湯の番台にも湿布の試供品で置いているじゃないですか。銭湯にしたことによって、かえって絵的にも面白くなりました。

で、次に「パコダテ人のしっぽって何のしっぽ？」って監督に聞かれて、「犬のしっぽっぽいと思ってたんですけど」って言ったら、「北海道やし、キタキツネにしよ」と言われました。キタキツネにはエキノコックスっていう寄生虫がいるんですね。人から人には伝染らないんですけど、動物を介してうつる寄生虫なので、パコダテ人に近づいたらうつるという、まあちょっと最近の Dengue 熱みたいな感じですね。蚊からしか伝染らないのに Dengue 熱の人が避けられたりした、あれと同じようなことが起きて、「寄生虫持ちや」ってアイドルから一転差別されるという展開にしました。で、差別されるひかるちゃんをお風呂屋の一家のお父さんお母さんお姉ちゃんを守るという、恋愛と家族愛も強まる話になりました。

作品作りというのは、「なんで？ そんで？」と連想ゲームしながら石ころを磨いて宝石にするという、





単純に言うとそういうことで、磨いていくうちに「これって個性の話だな」とメッセージが見えてきたりします。『パコダテ人』の中で主人公ひかるがしっぽをカミングアウトするシーンがあるんですが、「しっぽが生えてきて、最初はどうしようと思いました。でも、しっぽは欠点じゃなくておまけなんだ。『ひのひかる』にちっちゃい〇がついて『ぴのひかる』になった気分です」って言う、その前向きさが受け入れられてアイドルになるんです。映画公開時のポスター

には「ハッピーが生えてきた」というコピーを入れました。

個性といえば、私が中学一年生の時の担任の吉田恵子先生が、美術の先生でもあったんですが、私の描く絵をすごく褒めてくれました。「今井には今井の色がある」と。よく考えたら「うまい」とは一言も言われていなかったんですね。でも、私はほんとに前向きな性格で「人と違うモノをなんか持ってるのかな」と思った。その自信が、後にアメリカに留学したりとか、書く方に進んだりという背中を押してくれたと思います。サルもおだてられれば木に登るように、吉田先生だったり、新井一先生だったりにおだてられて、磨いてもらって、ここまでやってきました。

さて、予期せぬ注文って来ますよね。機嫌良く自分のやり方でやってるのに、全然違うこと言われる。皆さんも経験あると思います。その注文も活かし方によっては、光る石ころになるという面白い例を『子ぎつねヘレン』でお話しします。

映画は、いろんな企業がお金を出していて、「お金出すかわりにうちの商品を映してね」というのがあります。「きつねつながりで『赤いきつね』をくどいてきた！」と言われて、さあどうやって出そうかと困りました。大沢たかおさん演じる獣医と、深澤嵐くんという子役が演じる太一君、この二人は親子じゃなくて、松雪泰子さん演じるカメラマンが海外に出張する間、子どもを大学の時の友人である大沢たかおの家に勝手に送り込んで預けているという状況です。ただでさえ居候なのに、三重苦のきつねを飼いたいと言い出したので、大沢たかおさんが「きつねはダメだ」と言うシーンで、ちょうど赤いきつねを食べていて「ダメだ」と言いながらフタをビリッとやって、バンッと机に置くことにしました。フタは大写しになるし、客席には笑いが起きるシーンになりました。

もう一つ、ヘレンが死んじゃったところで涙のピークが来るんですが、その後でもう一回泣かせたいとプロデューサーに注文されて、これまたどうしようとなりました。悲しい涙はもう流れちゃっているので、嬉しい涙を流させたいなあと思いました。大沢たかおさんが『辛い』という字をすりガラスに書いて、「この字読めるか？」と聞いて、「唐辛子の真ん中の字に似てる」と太一少年は答えるんですが、「そうだ、『辛い』に太一の『一』を足すと『幸せ』になる。ヘレンは君に会ってなかったらもう死んでいた。君に会ったおかげで長生きしたんだよ」というやりとりをつけ足しました。

「赤いきつね」にせよ、「辛+一」にせよ、リクエストされなかったら生まれなかったシーンなんですね。このように、思わぬ注文が入った時に、いかに「削るのではなく彫刻」するかを心がけています。削るだ

けだとどんどんやせ細っていくので、なるべく豊かにすることを考えます。

ここで絵本を紹介したいんですが、『わにのだんす』。私の出身の堺市の人がやってる絵本レーベル、この絵本づくりのユニークなところは、子ども編集部員というのがあるんです。モノクロのラフの段階で子どもに読ませて、子どもの意見を反映させて仕上げます。で、『わにのだんす』をラフで読んでもらった時に、子どもからは特にネガティブな声は出ませんでした。お母さん方から出ました。「お金が目立ち過ぎ」と。踊ることが大好きなワニが道端で大道芸やると、みんなが投げ銭をくれるんですが、「絵本で投げ銭が飛んでるのが下品だ」と。そこで削るのではなくて、「あっ、世の中でこんなにお金飛び交ってる絵本でないや」と気づいて、「もっと目立たせよう！」とお金を増量したんです。

投げ銭をもらったワニは、キラキラ光る帽子を買い、キラキラ光る背広を買い、もっと儲けようと思って電車で行けるところまで行ったら、お金を持ってない子どもたちの村でした、という話なんですが、ワニの成り上がり思考をもっときつくして、「儲けたるで！」みたいなキラッとした目にしました。すると、お金を持たない子ども村に行った時の「ああ、純粋な笑顔が嬉しい」が際立つ。で、帰り道にまたお金を儲けたワニは最後に子どもたちの村にピアノを贈るんですね。自分が着飾ることよりも、誰かのためにお金を使う、ワニの成長がくっきりしました。

「金持ちより人持ち」っていう、だいぶ前に新聞で見た言葉、私はすごく好きなんですけど、この絵本で訴えたかったのもそのことでした。結局、作品を書いてどんどん私は『人持ち』になっている。これが、やっぱり脚本家の仕事の楽しみです。この絵本でも「お金が目立ち過ぎ」って言ってもらったから、そういう風に作れたんですね。これも彫刻の例だと思います。



次に朝ドラ「てっぱん」の話をして。おばあちゃんと孫がお好み焼き屋を開くという話で、おばあちゃんはまかないつきの下宿屋をやっていて、食べ物がすごい大きいテーマだったんですけど、おかずデザインさんという夫婦ユニットに料理監修に入ってもらったんです。その狙いは、本当においしいものを食べたときの実感を引き出すこと。撮りたい画が撮れると「カット」がかかってカメラが止まるんですけど、カットかかっても役者が食べ続ける。なので、カットをかけるのをずらして、もうずっと「撮ってて、撮ってて」って食べ続ける。それくらいおいしかった。


「てっぱん」は私と寺田敏雄さんと関えり香さんという3人で書いているんですが、私の担当した週で「いただきますから、ごちそうさままでを一話でやろう」となって、ほぼ「いただきます」から「ごちそうさま」までを15分間でやった回があったんです。本物の美味しいご飯でやると、食べ物で心の鎧が脱げる、それが嘘っぽく見えないんですね。

何がしたい話かというのがようやく26週かけて見えたんですけど、すごくシンプルなことで「家族というものは作るものだ」と。ひとつ屋根の下で暮らしていても、家族というのは作っていかないといけない、一緒にひとつ屋根の下に住んだからといって家族になれないんやなあと。

20週を書いている頃に「最終回どうする会議」をやったんですね。もういろんなアイデアがでた中で、「やっぱり最後は二人で食堂やるん違う？」というところに落ち着きました。最終回の前におばあちゃんと孫が尾道に帰って、鉄板を囲むんですけど、お好み焼きのタネでなんか字を書いている。「円」と書いて「まどか」と読むんですけど、赤ちゃんの名前なんですね。この「まどか」という名前もまた、「あーそういうことやったんや」と思ったんですけど、「てっぱん」というのは、ひとりひとりの点が出会って、線を作って、それが円になる話やったんやなあ、と。「磨く」というのは、結局石ころの中から、なんかネタというか良いところを拾って、それをつないでいってるんですね。「拾う」「つなぐ」がすごい大事なんですね。

さて、今日のように積極的に外に講演に行くようになったのは、3.11がきっかけです。3.11があった9日後2011年3月20日に、この京大で講演をしました。私のいた京都大学応援団の総会の講演でした。ちょうど「てっぱん」が2月に脱稿したばかりで、何もすることがなく、ほわーんとしてるところに地震が来た。ますます何もできなくなった。「なにをしゃべればいいんやろ」と頭が真っ白になった。地震から3,4日後くらいに、新聞の風刺コラムに『足りないもの 伝力。東京電力』と投書が載っていました。電力不足で、計画停電もあり原発の不安もあり、世の中をかなり混乱させてたんですが、それは伝え方の問題じゃないかと揶揄している。これを見た時に私はハッとしたんですね。脚本家の日々やっている連想ゲームというのは「伝力」を鍛えることである、と。最初から宝石は落ちていない。磨くのは自分次第。「ああこの話を講演ですればいいんや」とラクになりました。

それ以来、主に学校での講演や授業に力を入れています。9月には舞鶴の高校のオープンスクールで講演とワークショップを、堺市の小学校で鳥獣戯画にストーリーをつけるという授業をしました。ここでも

 <p><b>想像力 × ? = !</b>  <b>いくつもからひとつを選ぶ = 個性</b></p>	<p><b>子どもはなんで?の天才</b>  <small>ひらめき</small></p> <p><b>大人はそんで?の天才</b>  <small>拾う → つなぐ</small></p>
---	--

大事なのは、子どもの想像力が働くような、いい「？」を投げかけることです。子どもは「なんで？」の天才です。それを受け止める大人は「そんで？」の天才でありたいと思っています。

連想ゲームで拾ってつないでいければ、子どもも脚本開発の役に立ちます。私が書いている『おじゃる丸』のネタ、半分以上は8歳の娘、珠江が考えています。おじゃる丸って8人で書いてるんです。ひとりで書くよりも8人で書いたほうが競争でもまれて、クオリティを保てるんですね。8人で競争なので、おじゃる丸5歳と歳が近い娘の視点は大事です。もちろん珠江がすべて考えるわけじゃなく、珠江の思いつきを私があらすじにしてるわけなんですけども。

連想ゲームっていうのは、頭のなかにあるネタをくっつけていくことなので、やっぱりたくさん石ころ



を持って人勝ちなんですね。まあ、引き出しが多たってことですね。その引き出しを私がどうやって増やしているか。私がコピーライターで入社した時に言われたのが「頭のテープレコーダーを回せ」。時代を感じますが、当時もうテープレコーダーの時代じゃなかったんですが。今だと IC レコーダーとでも言うのかもしれないですけど、まあ頭のビデオカメラとしましょう。『頭のビデオカメラを回す』。例えば電車乗ってる、あるいはファミレスにいと周りの人が結構面白い話をしてますよね。そういうのを、なんとなく聞くんじゃなく、今から録音・録画しようと思って聞くと、結構ネタとして頭に入るんですね。こういう時も「なんで?」「そんで?」「へえ〜!」と思いながら聞く。「なんで?そんで?へえ〜!」と思った時にスイッチが入るんです。

## 頭のビデオカメラ

なんで?

そんで?

へえ〜!

?と!がスイッチ

『風の絨毯』という日本・イラン合作映画のプロデューサーが、英語を勉強していた時の先生に聞いたという言葉がありまして、「傘と心は開いたときがいちばん役に立つ」。たぶん原文は「The umbrella and the mind works best when open」だと思んですけど、この言葉すごい好きなんですね。傘って閉じてる時ってとんがってるし、すごい持ち方して後ろ危ない人とかいますが、開いてる時というのはいろんなものが飛び込むようにできてるんじゃないか

など。私は普段からおじゃる丸の週一回の会議に毎回3本ずつくらい出さないといけないので、毎回ネタネタと思いつきながら歩いてるんですけど、そうやって歩いてると何かが飛び込んできます。

もうひとつ引き出しを増やすのにオススメしてるのは「脳みその出張所」を持つこと。交換日記を含めて大学ノート80冊分日記を書きました。書くことそのものが連想ゲームなんですね。日記を読み返すと、中学校時代の悩みとかも書いてて、中学生でもいろんな事考えてたんだなあと思います。

朝ドラ「つばさ」の中にこんなセリフがあります。「起きてしまった物語は変えられない。でも、物語の続きは、あなたの手の中にある」。日常で嫌なこととか納得いかないことがあった時に、自分なりのハッピーエンドを日記の中に書く、そういう救われ方もあるかなあと。私も、仲直りできなかった人との仲直りを脚本の中で主人公に託したりとか、そういうことをやっています。

今日のお話を総合して、『ブレン・ストーミング・ティーン』という私の書いた本の中にある言葉で「宝物はあなたの中にある。それを宝の山にするか、宝の持ち腐れにするかはあなた次第」。これ2004年に出した本なんですが、私が広告代理店で働いていた時の実体験を小説にしたんです。自分は何も持ってないと思っている人に対して、「いや宝物はあなたの中にあるんですよ」と。それはあなた次第であり、ハテナを投げかける大人次第でもあると思いますし、学校の先生方には「あなたの教え子たちもそうですよ」と話しています。

## 脳みその出張所



書く=連想ゲーム

## 教育学研究科・教育学部修了・卒業者に対する寄付に関する調査結果の報告

高見 茂（理事補・比較教育政策学講座教授）

平成 25 年 11 月に開催された同窓会役員会のご承認を得て、教育学研究科・教育学部修了・卒業者を対象に「京都大学の社会貢献と京都大学卒業・修了者の意識に関する調査」を実施した。この調査は、筆者を研究代表とする日本学術振興会の平成 25、26、27 年度科学研究費補助金プロジェクトの一環であるが、当時筆者は大学本部の京大基金担当の理事補として大学全体の基金の充実を担当していたこともあり、京都大学全体の基金戦略策定の基礎資料収集という意味合いも込められていた。同窓会事務局にランダムに選んで頂いた 200 名の同窓会員に質問紙を送付し、84 名の方からご回答頂いた（回収率 42%、そのうち男性 74%、女性 26%）。回答者の年代では 50 歳以上が 80%を占めていた。

京都大学の研究・教育・社会貢献活動・社会連携活動については、理系の実情について認知しているとの回答が過半数以上で、その内容についても高く評価している。これは iPS 細胞を巡る目覚ましい研究成果の影響だとみられる。他方文系の実情については、認知者の割合は 40%程度に低下し、評価するという回答も 50%を僅かに超える程度である。教養教育については、認知者は 20%程度で評価についてはどちらとも言えないが 57%となっている。こうした判断の基礎となる情報の収集ルートはメディア媒体が圧倒的（全体の 48%）であり、次いで同窓会からのニューズレター（同 19%）となっている。京都大学の実情に関する認知状況の調査項目の回答に照らしてみると、今後大学の実情に関する同窓会に対する効果的な情報提供手法についても検討することが肝要であろう。

さらに今後の京都大学の方向性として、①研究型大学として進むのか、②地域貢献型大学として進むのか、③両方の機能をバランスよく備えるべきか、聞いたところ、①を支持される方が 25%おられる一方、③を支持される回答者が 69%に達していた。京大が目指す方向性と見事に一致していると指摘できる。

また回答者ご自身に社会貢献に関わる意識をお聞きしたところ、8 割以上の方が社会貢献に高い関心を示された。特に寄付に限定した回答に焦点を当てると、その動機は「寄付対象に対する同情・共感の気持ち」が最も強く、次いで「寄付対象の活動目的・ねらいが明確」が続く。そして大学の社会貢献に参加する意思をお持ちかどうかお聞きしたところ、「関心がある」、「少しは関心がある」を合せて 56%の方から肯定的な反応があった。さらに同窓会員の大学の社会貢献への参加を一層促進するための条件をお聞きしたところ、「大学での研究・教育と社会貢献の関連についての明確な情報の提供」が最も多く、「大学での研究・教育内容に関する具体的な情報の提供」、「大学からの積極的な参加の呼びかけ・キャンペーン」、「参加の仕方・方法についての分かり易さ」の順になっていた。

大学の社会貢献を通じた社会貢献に参加することに関心を示された回答者を対象に、具体的にどのような貢献機会に関心をお持ちかお聞きしたところ、i) 人材育成全般のための教育費の充実、ii) 社会貢献の明確な特定研究の充実、iii) 社会貢献の明確な特定研究・教育を支える施設・設備の充実への協力（特定目的投資的経費の充実）に比較的高い関心が寄せられていた。

他方、同窓会会員の京都大学の現在の財務体質等についての認知度は極めて低く、詳しくは知らない、全く知らないという回答が 8 割を超えていた。こうした厳しい財務体質を乗り越える戦略についてお聞きしたところ、i) 必要とする寄付等の目的・用途等の明確な説明と関係者の理解、ii) 大学の知財戦略の

一層の強化と特許収入の増加、iii)「教育は大事である！」という大学支援世論の形成と政治過程への働きかけによる公財政支出教育費の確保、といった項目の回答数が多く見られた。

京都大学にあっては、法人化以降、大学経営の命綱とも言えるべき運営費交付金が年々削減の一途を辿り、補填財源の確保は正に焦眉の急となっている。それは、自由度の高い安定的な教育資源の調達の方途を探ることに他ならず、卒業・修了生、企業等からの寄付金の獲得のための効果的戦略を構築することに帰結する。今回の質問紙調査の結果、効果的な寄付金獲得戦略としては次の3点が指摘できる。すなわち、i) 効果的な手法で、同窓会員に本研究科・学部の教育・研究・社会貢献の実情を積極的に発信すること、ii) 新たな教育資源としての寄付を獲得するに当たっては、その寄付金の使用目的・ねらいを明確にし、寄付者の善意が大学の教育・研究・社会貢献活動を通じて明確に可視化されること、iii) 施設・設備といったハード面より、人材育成等教育面—すなわちソフト面に高い関心が寄せられる傾向があり、教育内容充実の支援獲得を重点化すること、である。

こうした結果を踏まえて、本学部・研究科にあっては執行部を中心に新たな教育資源獲得戦略を構築し、同窓会員の皆様の温かいご支援をしっかりと獲得し、教育・研究条件の充実を図られることを期待したい。